

喜撰 (六歌仙容彩の内)

我庵は

芝居の辰巳常盤町

しかも浮世を離れ里

世辞で丸めて浮気でこねて

小町桜の眺めに飽かぬ

彼奴にうっかり眉毛を読まれ

ほうしはきつゝきの

素見ぞめきで帰らりよか

わしは瓢箪

浮く身ぢやけれど

主は鯨のとり所

ぬらりくらりと今日もまた

浮かれ浮かれて来りける

若しやと御簾を余所乍ら

喜撰の花香茶の給仕

波立つ胸を押し撫で

しまりなけれど鉢巻も

幾度しめて水馴れ掉

濡れて見たさと手を取って

小野の夕立縁の時雨

化粧の窓に手を組んで

どう見直して胸振ひ

今日の御見の初昔

悪性と聞いて此胸が

朧の月や

松の影

わたしやお前の政所

何時か果報も一森と

褒められたさの身の願ひ

惚れ過ぎる程

愚痴な気に

心の底の知れ兼ねて

ちれつたいでは

ないかいな

何故惚れさしたコレ姉え

うぬぼれ過ぎた悪洒落な

賤が伏屋に

糸取るよりも

ぬしの心が

それ

取りにくい

エゝさりと

機嫌気づまも不断から

酔ったお客の扱ひは

見馴れ聞き馴れ目顔で悟る

粹を通した其あとは

コレひざり言

粹と云はれて浮いた同士

ヤレ色の世界に出家を遂げる

ヤレ

細かにちよぼくれ

愚僧が住家は

京の辰巳の

世を宇治山とや

人は云ふなり

ちやくちやさえんの吐す濃い茶の

緑の橋姫

夕べの口舌の袖の移香

花橘の小島が崎より一散走りに

走って戻れば

内の嬢が怪気の角文字

牛も涎を

流るゝ川瀬の

内へ戻って我からこがる

蛸を集め手管の学問

唐も日本も

里の恋路か

山吹流しの水に照り添ふ

朝日のお山に誰でも彼でも

二世の契りは平等院とや

さりとは是はうるせいこんだに

帰命頂礼どら如來

こゝに極まる楽しさよ

難波江の

片葉の芦の結ばれかゝり

ヨイヤサ

コレワイナ

解けてほぐれて逢ふことも

待つに甲斐ある

ヤンレ夏の雨

ヤアトコセ

ヨイヤナア

アリヤ

これわいな

このなんでもせえ

住吉の

岸辺の茶屋に腰打ちかけて

ヨイヤサ コレハイナ

松で釣るやれ蛤を

逢ふて嬉しき

ヤンレ夏の風

ヤアトコセ

ヨイヤナア

アリヤ

これわいな

此のなんでもせえ

姉さんおん所かえ

島田

金谷は川のおひ

旅籠はいつもお定まり

お泊りならば泊らんせ

お風呂もどん 沸いている

障子も此頃張替へて

畳も此頃かへてある

お寝間のお伽も負けにして

草鞋の紐に仇どけの

結んだ縁の一夜妻

あんまり憎つも

あるまいか

テモさうだろ さうである

住吉様の岸の姫松めでたさよ

来世は生を黒牡丹

己が庵へ帰り行く

我が里さしてぞ急ぎ行く。